

アジアで初めての世界バラ会議

岐阜県立国際園芸アカデミー

上田 善弘

本年5月11日から5月17日まで、大阪にて「世界バラ会議大阪大会2006」が開催された。私はこの大会にて講演会の演者として参加したので、その概要について報告する。

世界バラ会議とは

世界バラ会議は、世界37ヶ国のバラ会が加盟している世界バラ会連合が、3年に1度開催する世界大会である。1971年に第1回大会がニュージーランドのハミルトンで開催され、本年は14回目となり、東洋で初めての開催であった。

世界バラ会連合の掲げる目標は、バラについての知識の交換と普及、研究の促進、分類やコンテストの審査基準の提示、国際的な新品種登録に関することなどで、世界バラ会議はこのような目標を達成するための方策を論じ合うとともに、世界のバラ愛好家の相互親善、情報交換の場として機能してきた。大会は、各目標について討議を行う各種委員会、情報交換のための講演会、バラ園見学や開催国の文化紹介のためのツアー、展示会などからなる。

世界バラ会議を日本に誘致をという動きは1990年代からあり、1994年のニュージーランド・クライストチャーチ市での第10回大会で、横浜市で世界大会を開催する意志表示をされたが、他の立候補地に敗れた経緯がある。今大会の誘致決定は、第12回アメリカ・ヒューストン市での大会になる。

今大会の運営団体は、大阪市、7大阪市スポーツ・みどり振興協会および7日本ばら会である。この7日本ばら会が世界バラ会連合に加盟している唯一の日本のばら団体であり、会長は中曽根康弘氏で理事長は長田武雄氏である。今回の開催にあたっては、7日本ばら会理事の小川晶氏の功績には敬服するばかりであった。小川氏は世界バラ会連合副会長であり、世界中のバラ愛好家との交友関係により、おそらくこれまでの世界大会で最も多いであろう、707名(うち371名が

海外からの参加者)の参加者(登録数)があった。

冒頭に述べた期間が正式な開催期間であるが、プレツアーは5月9日から5月11日まで、ポストツアーは5月18日から5月22日までであり、この長期にわたる7大阪市スポーツ・みどり振興協会内の世界バラ会議大阪大会2006実行組織の準備から運営までのご苦労はいかばかりかと察せられる。今大会は大阪市の多大な支援がなければとても実行不可能であったらう。ちなみに、メイン会場は2カ所。開会式および講演会が大阪国際交流センターで、歓迎レセプション他の式典が都ホテル大阪であった。

ばらフェスタ大阪

今大会に合わせ、5月12日から5月14日までの3日間にわたり、大阪市の花博記念公園鶴見緑地内・水の館ホールで「ばらフェスタ大阪」と称するバラの展示会とローズコンテストが開催された。この展示会の目玉が、世界で初めて遺伝子組み替えて青色遺伝子が組み込まれたサントリーの青いバラであった。関西で初めての展示とあり、厳重な警戒のもと、一目見ようといへんな行列であった。青いバラは温度調節されたガラスケースに隔離・展示され、もちろん写真撮影も禁止されていた。私も実物を見るのは初めてであったが、確かに従来の交配育種では得られなかった青さであった。

青いバラ以外には、日本での開催ということもあり、東洋のバラを主題とし、現代バラの成立に大きな働きをした日本と中国の野生バラ、中国の古い品種が展示された。和風ということで、寝殿造り風庭園やバラ人形、日本独特の園芸技術による懸崖造りのバラ、バラ盆栽も展示された。また大阪府華道家協会所属72流派、100名によるバラのいけばな展示は壮観であった。

ローズコンテストには全国から687作品の応募があり、36カテゴリーからなる作品が国内外の多数の審査委員により審査された。今回の特色として、通常の世



ばらフェスタ大阪での懸崖造りのバラ

界大会では行われぬ、切り花生産者によるコンテストも行われた。切り花生産者部門では、近年の傾向である、生産者自らの育種による新品種も見られ、多様化した切り花品種を見ることができた。

関西で初めてののがかりなバラ展示会ということもあり、3日間の開催で、約6万6千人の入場者があった。毎年開催される西武ドームのバラ展の盛況にみられるように、改めてバラの集客力を知ることとなった。

講演会

5月14、16、17日の3日間、大阪国際交流センターにおいて、講演会が開催された。「世界のバラ」と「バラの今日と未来」をテーマに、世界中の21名の演者により講演が行われた。演者の内訳は、日本4名、中国1名、フランス3名、スイス1名、南アフリカ1名、ルーマニア1名、チェコ1名、スロバキア1名、パキスタン1名、バミューダ1名、インド1名、オーストラリア2名、アメリカ1名、イギリス1名、ドイツ1名と多彩であった。ヨーロッパからの演者が多く、しかも東欧圏から3名もあり、いかにヨーロッパ人がバラに熱心かを知ることができる。日本からの演者は、花葉会会員でもある千葉県立中央博物館の御巫由紀氏、元資生堂研究所の蓬田勝之氏、サントリーの田中良和氏および私であった。

御巫氏は得意とされる「日本の野生バラ」について講演された。講演では、現代バラに重要なはたらきをしたノイバラ、テリハノイバラ、ハマナスやその他興味深い日本の野生種について、その野生状態、分類における問題、日本文化との関わりまで幅広く話され、多くの聴講者からたいへん興味をもたれ、



講演会での著者

活発な質疑が行われた。

蓬田氏のご専門の「バラの香りの科学」、田中氏は今回の展示にも関わる「青いバラ：夢？現実？」と題して、それぞれ講演された。残念ながら両氏の講演については聴講できなかったが、科学研究としての日本のレベルを世界に誇示する意味でも非常に有意義な講演であり、誰もが興味深く聴講されたことと思われる。

私は、「中国とラオスのバラ」と題して、これまで訪れた中国とラオスの野生種と古い品種について、現地の写真を交え、現代バラに果たした役割、今後の育種への利用価値について講演を行った。今大会では中国からの演者も中国の野生種を紹介されることになっていたが、直前にキャンセルが入り、中国バラの紹介は私だけになった。ヨーロッパの人たちにはなかなか訪れる機会のない中国、聴講者にはたいへん興味をもって聴いていただいた。

海外からの演者の講演については、初日の講演のみしか聴けなかったが、東欧圏のバラについては、意外なコレクションとバラ園には興味深いものがあった。

その他、パキスタンの野生バラとバラ文化、ヨーロッパへのバラ導入の中継地となったバミューダのバラについての講演、フランスのメイアン社によるバラ育種、インドにおける耐暑性バラの育種、世界最大のバラコレクションをもつドイツのサンゲルハウゼンバラ園についてなど、なかなか聴けない講演ばかりであるが、どれも聴講できず残念であった。

各種委員会

大会中には世界中からバラの愛好者、専門家が集まるということもあり、さまざまな委員会が開催される。

私も詳しくは知らないが、重要な委員会に、「ヘリテージ・ローズ委員会」(Heritage Rose Committee)と「保存委員会」(Conservation Committee)がある。ヘリテージ・ローズとは直訳すれば、遺産バラということになるが、日本でいうオールドローズと同じ意味である。ヘリテージ・ローズ会議というのがあり、英国に事務局がある。ヨーロッパでは、古いバラ品種は文化遺産であるという考えがあり、人が長年に渡って育成してきた貴重なものであるということである。このような意味をもつヘリテージ・ローズ委員会は、当然のこととして、保存委員会と関連し、委員会メンバーもほぼ同じである。保存委員会の大きな仕事として、バラ遺伝資源のデータベースの構築がある。この6月に世界ばら会連合のホームページで公開されたが、品種名から検索でき、品種の系統、花色、作出者、作出年、その品種を保存しているバラ園が分かる。また、バラ園を検索することにより、その保有品種を知ることができる。

この保存委員会の委員長を6年間務めてこられた、イタリアのヘルガ・ブリシェ女史が、今回、私の勤務する岐阜県立国際園芸アカデミーを訪問されるとともに、岐阜県の花フェスタ記念公園でバラの遺伝資源保存について講演された。その際に花フェスタ記念公園で保存している7000種類のバラのリストの公開を求められた。現在、公開すべく、私も関わって、リスト作成中である。

コンベンションツアー

先述のプレおよびポストツアー、大会中の各種ツアーにて、大阪や周辺のバラ園、文化施設、京都、奈良、姫路の世界遺産、京都の葵祭、岐阜、姫路、東京、千葉などのバラ園を視察された。

岐阜のツアーでは、当地、花フェスタ記念公園を大会中、5月15日に大阪からバスにて1日訪問された。花フェスタ記念公園としては、初めて世界中のバラ愛好家に公園のバラを見ていただいた。参加者は209名で、そのうち195名が海外の方であった。世界中の方々に公園を知って頂き、宣伝していただくいい機会とばかりに、公園としてもたいへんな力の入れようであった。メインとなる西ゲートでは中学生による和太鼓で迎え、最初、ミュージアムホールにて公園の紹介を映像にて行い、その後7000種類を保有するバラ園を案内した。本年は冬の寒さが厳しかったこと、5月上



花フェスタ記念公園内にて
海外の審査員による国際コンテストのバラ審査

旬が例年より寒かったことから、バラの開花には早かったが、整備されたバラ園とコレクションを堪能していただいた。

当公園では、1999年より世界中からガーデンローズの新品種を集め国際コンテストを開催している。今回、世界中のバラ愛好家が公園を視察されたことから、世界ばら会連合会長のトーマス・ケアンズ氏を初めとして数名の海外の方にバラの審査をしていただいた。

ポストツアーでは、丁度開催されていた西武ドームでの国際バラとガーデニングショウにも144名の方が視察された。

当初はどのくらいの参加者が集まるのか、海外参加者数はどうなるか懸念されたが、それも取り越し苦労にすぎないほどの人が集まれた。横浜市への誘致ができなかった際にも、日本のバラがあまり高く評価されていなかったためではないかといわれていたが、今大会で、日本のバラ愛好家の熱心さ、各地の個性的なコレクションをもつバラ園に参加者は感心されるとともに認識を新たにされたものと思われる。これを機に日本のバラ園芸も高く評価されることになるのであろう。しかし、あるバラ園芸家も苦言を述べられているが、日本のテレビ、雑誌の報道は、残念ながら大会のスケールやその意義について正確には報道していなかった。鶴見緑地でのバラ展示のみ報道され、大会の主たる行事である講演会や各種委員会についてはほとんど触れられていない。本大会が日本で開催されたことは日本の園芸史上画期的なことであるが、一方で関心を示さなかった日本の園芸ジャーナリズムの底の浅さが悔やまれる。